

新刊紹介

上田博・小倉真理子共著

『和歌文学大系27 別離／一路』

木股 知史

(甲南大学教授)

若山牧水の第三歌集『別離』の校注にあつた上田博氏は、「年譜」として明らかにされる作者と作者をめぐる「事実」を直ちに歌の解釈・鑑賞に取り入れることをせず、(中略)一冊の歌集と示されたものの中で、即ち歌の配列(流れ、前後の関連性)の中で鑑賞しようとした」と述べている。たとえば、「おぼる夜の停車場内の雑沓に一すぢまぢる少女の香あり」という一首は、「前歌までの、外部を閉じた精神内部の光景が、やつと外へ開かれる。薄明りのなかにロマン的香気が漂う」と鑑賞されている。直前の歌は、「見るかぎり友の顔みな死にはてしきびしきなかに独りものをおもふ」というもので、それまで閉ざされた心を表現した歌が何首

が続いている。上田氏の「精神内部の光景が、やつと外へ開かれる」という言い方は、歌は事実の表現におわらず、つねに心の閥歴を表現するものだということを示しているように思える。

一首一首について、歌人の生活的閥歴に還元する注釈をいくら詳しくつけても、それは歌集を読んだことにはならない。上田氏の鑑賞は、一首一首を事実の記録として読むのではなく、歌集を心の物語として読むことを教えてくれる。「うす青くけふもねがての枕べに這ひまつはれり海のひびきは」という一首の「うす青く」は、「赤く見ゆ」、「病む」とし」から推敲されてきたが、上田氏は、「改稿を重ねて、寂しさ極まって透明な内面が象徴化された」と鑑賞している。うす青い海のひびきは、現実のものであるよりも、心の比喩として現れた幻像のようにとらえられ、私たちは事実から昇華された心の体験に共感することができるのである。

歌集『別離』の背景には、牧水と愛人

との恋愛の沸騰から冷却までという素材的事実があるが、上田氏がとらえようとしているのは、事実の向こう側にある普遍的な心の体験の物語である。上田氏に導かれて千余首を読んでいくと、事実にな注釈へのこだわりは、近代短歌の物語的豊饒さを覆い隠してきたのかもしれない、と思わせられる。併収されている木下利玄『一路』(小倉真理子氏校注)を読めば、近代短歌の裾野の広さを実感することができる一冊となっている。

(明治書院 二〇〇〇年一月)

三四二頁 本体価格六五〇〇円)